

少し明るくなってきたと見よつたら、流されて来た家の下店の上に蛙が止まったように男の子がチヨコンと座っていた。「おまあ助かったんけえ、また波が来るよってキヨロキヨロせんと早う逃げー」と言うと一目散に道路に駆け上がって行った。私は立って見たが田圃がずるずるして立てられず四つ這いに這うて岸へと辿り着いた。ようよう坂を這い上がって灘道まで着いたけれど、子供を背負うとるし綿入れの着物づくめで濡れて重とて歩けず、小林牧場まで這い込んで行った。

牧場のカド(表)ではいっぱい避難して来た人達がわいわい言よつたが、その横をくぐって裏口へと廻った。裏口には誰もおらんで障子を開けて入つたら庭(土間)で先刻の男の子(奥英治君)が震いよつた。「おまあ助かったんけえ、早よう抜きー、つるつる裸で入りー、何じゃ着けとられんじよー」と言うて中を見ると、高い櫓に昔の木綿蒲団を高く積んであるんで私も裸になり、子供も服を脱がして抱きしめて一緒に入いよつた。七時ごろになるとおしっこがしうなつて辛抱ができず「誰ぞおらんのけー、何ぞ貸してくれー」とどなった。表の部屋で橋本力さんの母親シヅノさんが救助されて、小林先生が湯を沸かしてもって来たり火で暖めたりして、子供たちが「お母さん死ぬな！お母さん死ぬな！」皆がかかっている誰かが付かない。大声で怒鳴っていたら誰かが乳牛に着せる物(つぶしまである布切)を放ってくれたので、それを着いて便所へ行って来た。臭くてもかまんどそれで子供を包んで暖めていた。

しばらくすると夫が私たちが小林牧場で助かっていると聞いて、見に来てくれたので嬉しかった。濡れた時は毛布でなくて肌着が欲しかった。夫が肌着を持って来てくれて、母子二人が着て火で暖まったりしたら子供も泣き出して助かった。小林牧場では大勢避難して来ていた人たちが皆に、牛乳を暖めて振舞ってくれた。皆嬉しかった。夜が明けて帰って見ると家は半壊で傾いて残っていた。小島国太郎さん宅まで流されて、隣の真崎亀一さん宅、私宅、横田喜代一さん宅の三軒が残っていた。前の喜来晴茂さん宅が流されて、沖吉丈吉さんと小島千太郎さん宅が半壊で残っていた。夫は隣組長だったのでほとんど家にはおらず母と家を片づけた。私たちは灘の原さん宅で二晩泊してもらい、それからしばらく沖吉の兄の家の二階で母は上の子供二人を連れて灘道の亀山神社の下の本家の納屋に分かれて生活した。

地あげをしてから家を直して皆で暮らせるようになった。しかし下の男の子は地あげの最中に風邪をひいて、つってつってして生後五か月で亡くなつてかわいそうだった。欲を捨てて早く逃げたらよかったのに、お金が無かつたら困る、子供が風邪をひいたら困ると家へ飛び込んだのが失敗で、慌てて折角持って逃げたつもりの紙札も、逃げる途中潮を待つ間に袋の中を覗いたら、紙札でなく蚊取線香を持って逃げていた。母は子供二人を連れて直ぐに疎開納屋に逃げて、火を焚いて無事助けてくれた。